

国 語

《注意》 字数制限のある問題では、句読点や記号も一字として数えることとします。

「二」 次の問題文を読んで、後の問いに答えなさい。

- ① 遠くに住む祖父を訪ねる。
- ② ライバルとの戦いに敗れる。
- ③ 首相が辞任した。
- ④ 綿密な計画を立てる。
- ⑤ 学校の周りを散策する。
- ⑥ スんだことを今さら言うな。
- ⑦ ツクエの前に座る。
- ⑧ ウラニワで植物を育てる。
- ⑨ 外国に車をユシユツする。
- ⑩ 毎朝ヤサイジュースを飲む。
- ⑪ やきいもを食べる。
- ⑫ お客さまをアンナイする。
- ⑬ セイジツに約束を守る。
- ⑭ セミのヨウチュウを見た。
- ⑮ エダサキにてんとう虫がとまっている。

「二」 次の問題文を読んで、後の問いに答えなさい。

今までは、祈りというのは、主に宗教の世界のものでした。宗教の世界では奇跡というものがよく起きています。それがあから、人々は宗教を信じるというところがあったわけです。奇跡は誰にも興味深い現象ですが、近代以降の科学者は、この世界には

① 立ち入ろうとしませんでした。

そんなことをしなくても、科学の世界には研究すべき材料がいっぱいありました。また、宗教との②いたずらな争いを避けるということもあつたでしょう。宗教と科学はお互いの領域に立ち入らないことで、棲み分けを行ってきたのです。

③、遺伝子の研究が進むと、④そうもいつていられなくなりました。生命の暗号が解読されるにつれて、「生命の神秘」に⑤科学の照明が当てられるようになったからです。遺伝子は間違ひなく生命を⑥司っています。遺伝子の情報とその指令がなかったら、たった一個の細胞すら生きていけないのです。

遺伝子は※2精巧にして絶妙な生命の働きに関わっています。これら遺伝子の持つ※3膨大な情報と、※4秩序だった働きは、※5人為はもちろんのこと、偶然にできたとも考えにくく、科学の常識や※6人智をはるかに超えた大きな存在を想定せざるをえません。それを私たちは「サムシング・グレート」（偉大なる何ものか）と呼んでいるのです。

つまり、今、科学は遺伝子を説明することで、生命の仕組みを読み解きつつあるけれども、同時にこれまで宗教の領域でしか扱ってこなかった祈りとか⑥奇跡とかにも目を向けざるをえなくなってきました。

この視点から改めて祈りというものを見直してみると、人類は宗教教団が生まれるずっと以前から祈り続ける存在であったことがわかります。これは今も変わりません。（略）宗教を信じていなくても、困ったときや何か強い願いごとがあるとき、人は思わず祈ってしまいます。祈りに無縁な人間は一人もいない、と聞いていいでしょう。でも、これは不思議でも何でもありません。人間にとって祈りとは、実は生きることそのものだからです。

人間を定義するとき、ホモ・サピエンス（知恵の人）とかホモ・ルーデンス（遊ぶ人）とかいいますが、私たちは自然に祈りをする「祈る人」でもあるのです。あるいは、宗教を広い意味で捉えて、人間はホモ・レリギオオス（宗教的な人）ともいえるのです。

⑦この見方には、疑問を感じる人がいるかもしれません。「自分はぜんぜん祈ったりしない」と。でも、そう感じるのは、祈りを宗教的に考えすぎているからです。宗教を信じていない人でも、毎日生きようとしていることに変わりはありません。生きようとする人は、祈ることと無縁ではられないのです。

なぜでしょうか。このことは生命の仕組みから説明できます。

生命の最小単位である細胞は、三十八億年前に誕生したときから、ずっと生命の火を絶やさないように働いてきました。そして今も細胞は、⑧生命のリレーを続けようとしています。なぜかわからないが、細胞とはそういうものなのです。

その細胞で私たちの体は作られています。だから、私たちは無意識的にも生きようとしています。それも少しでもよりよく生きようと。遺伝子も常にその方向で働きます。これが祈りでなくて何でしょう。つまり、鳥が空を飛び、魚が水中を泳ぐように、祈りとは生命に自然本性として備わった属性であり、この世に祈らない人間はいないということです。

（村上和雄・棚次正和『人は何のために「祈る」のか』より。設問の都合上、文章を一部改変しています。）

- ※1 司って…支配して
- ※2 精巧…くるいがなく正確にできていること
- ※3 膨大…非常に多いこと
- ※4 秩序…物事が望ましい状態を保つための順序や決まり
- ※5 人為…人の力で行われたもの
- ※6 人智…人の知識や知恵のこと

問一 ①に入れるのに最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
ア、たいへん イ、くつきり ウ、どんどん エ、けっして

問二 線部②「いたづらな」の問題文中の意味として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
ア、過激な イ、無駄な ウ、意地悪な エ、小さな

問三 ③に入れるのに最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
ア、つまり イ、そこで ウ、なぜなら エ、ところが

問四 線部④「そうもいっていらなくなりました」とありますが、
(一)「そう」とはどのようなことを指しますか。問題文中からぬき出して答えなさい。

(二)なぜ「そうもいっていられなく」なったのですか。理由として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
ア、かつて科学の世界に大量にあったはずの研究材料が、将来的には全て無くなってしまふことが近代に入ってからわかったから。
イ、近代まで宗教と科学は争ってきたが、科学が祈りの力を認めたことにより宗教の立場がだんだん優位になっていったから。
ウ、遺伝子の膨大な情報と秩序だった働きを見ると、科学の常識や人智を超えた大きな存在を認めないわけにはいかなかったから。
エ、人間の生命を司る遺伝子が祈りによって生み出されることが解明され、より精巧な生命の働きを実現できるようになったから。

問五 線部⑤「科学の照明が当てられるようになった」とありますが、
(一)それはどういうことですか。次の文の()に入れるのに最もふさわしい言葉を後のア～エから選び、記号で答えなさい。
科学の力で()できるようになった、ということ。

ア、解明 イ、発明 ウ、発光 エ、解体
(二)(一)の例としてふさわしくないものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
ア、風の利用する。パラグライダーに「科学の照明」が当てられたことによって、空を飛ぶという人類の夢が実現可能であることがわかった。
イ、珍しきから神の使いとされていた白へびに「科学の照明」が当てられたことによって、遺伝子の突然変異によって生まれることがわかった。
ウ、オバケの仕業だと考えられていた金縛りに「科学の照明」が当てられたことによって、動けなくなるのは脳の働きが原因であることがわかった。
エ、神の怒りと考えられていたカミナリに「科学の照明」が当てられたことによって、光や音は空気中の放電によって発生することがわかった。

問六 線部⑥「奇跡」とありますが、これを科学の分野では何と呼びますか、問題文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問七 線部⑦「この見方」とありますが、これはどのような見方のことですか。次の文の()にふさわしい言葉を、問題文中の言葉を用いて十五字以上二十字以内で答えなさい。
人間は() ()という見方。

問八 線部⑧「生命のリレー」とありますが、この言葉の意味として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
ア、生命はどの時代でも宗教を子孫に伝えたということ。 イ、生命は三十八億年前から周りと競争してきたということ。
ウ、生命は祈り続けることに喜びを感じるということ。 エ、生命は常に次世代に生命をつなぐとすること。

問九 問題文の説明として、次の文の()に入れるのに最もふさわしい言葉を、問題文中の言葉を用いて答えなさい。
(この文章では祈りと遺伝子の共通点は() ()ことだと言っている。)

「三」 次の問題文を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生のぼく(キヤプテン)は、将来建築家になることを夢見ている。同級生の家で、ぼくは、黒人の父親を持つハーランという少年と出会った。ハーランは手先が器用で、絵もとても上手だった。ぼくは自分よりハーランの方が建築家に向いているのではないかなやみハーランとあまり打ち解けられずにいた。そのころ、ぼくは友人のキムコから、豆腐屋が以前使っていた古い自転車をおしつけられた。豆腐屋が自転車のかわりに新しいオートバイを買ったからだ。

あのオートバイにちがいがなかった。①すれちがいざまぼくは振り返り、後ろの荷台に取りつけられている大きな木箱をたしかめた。ぴかぴかのオートバイには不似合いな古さだ。おじさんが吹くラップの音を聞きながら、ぼくは自転車のハンドルをぼん、と軽くたたいた。自転車は落ちこんでいるように思えたからだ。キムコが譲ってくれるよう豆腐屋に申し出なければ、ほしがる人はだれもいなかったらうから、廃車にされていたにちがいない。②十一月の風がぼくらだけに吹きつける。これからは鍵をかけて駐輪することにしてやろうか。

そうして打ち捨てられた気分が工場へ向かっていたとき、ランドセルを背負ったハーランが、道の先を歩いているのに気づいた。

「ハーラン」ぼくは横にならんで声をかけた。「いま、学校が終わったの?」

ハーランはうなずいた。

「※1ライオンは?」

「掃除当番が休みだから先に帰った。」

十メートルほど黙って進んでから、ぼくは言った。「後ろに乗る?」

「うん。」

なんのためらいもなくハーランがそう答えて荷台にまたがったので、ぼくは③うろたえた。

「おうちは、こっち?」

「うん。椅子、高いの?」

「低くしたいんだけど、レバーが固くて動かないんだ。」

ぼくは自転車からおりて、レバーが固いことを教えた。だがハーランがやってみるとレバーはあっさり動き、サドルは左右をきよきよきよとして首を引っこめた。またがってみるとちよびつたりの高さだった。またもやハーランの才能を見せつけられ、ぼくはみじめな気持ちになった。二人乗りのまま黙っていると才能の差がひらいていく感覚がどんどん強くなり、ぼくは思い切ったはずねた。

「ハーランは将来、なんになりたいの?」

ハーランは少しの間を空けた。「まだわからない。」

「絵がうまいんだから、画家になればいい。」

ハーランは低くうなった。「絵は趣味にしたほうがいいって、お父さんに言われたから。」

「どうして?」

「画家で生活していくのはたいへんだから。」

「貧乏ってこと?」

「うん。」

「貧乏じゃない画家だっているよ。貧乏になったらやめればいい。」

「やめられなくなるんだって。」

「どうして?」

「いままで絵を描いてきたことがなんにもならないことを受け入れるのはむずかしいからって。」

④その言葉の意味はわからなかったが、とにかく画家になるつもりはないことがはっきりしただけでじゅうぶんだった。

「ハーランは建築家になりたい?」

返事がなかった。

ぼくは繰り返した。「建築家になりたいの?」

「だって」意外そうな口ぶりで言う。「建築家はキャプテンでしょ。」

「そうだけど。」ハーランがはじめてぼくのことをキャプテンと呼んだことに少し驚いた。「ハーランになりたいならなればいい。」

「うん。建築家はキャプテンになるんだから。」

「べつにハーランがなったっていいんだよ。」

「ぼくはならない。」ハーランははっきりと言った。「建築家はキャプテン。」

ハーランの澄んだ声が⑤ひとつの事実をぼくに理解させた。これまでほとんど口をきかなかったのも、へだたりを作っていたのも、ぼくが原因なのだという事実を。

「ミロだ。ミロが二人乗りしてる。」

突然ぼくらに声がかげられた。ランドセルを背負った三人の少年たちがハーランを見て言う。

「ずるいぞ、ミロ。」

「学校の帰りに二人乗りしていいと思ってるのかよ。」

「先生に言ってるよ。」

口々に発せられる少年たちの言葉には⑥とげがあった。ぼくはハーランにたずねた。「⑦？」

「クラスメイト。」

その答えではつきりした。彼らは⑦ではないのだ。二人乗りしていることを少年たちはいつまでも※2誹謗している。ぼくはハーランにおりるようながさず、ペダルを踏みこんで少年たちの声を遠ざけた。黙っているのが気まじくなくなり、ぼくはハーランに質問を投げた。

「ミロっていうあだ名なの？」

ハーランは答えない。声が風にさらわれてハーランの耳に届かなかったのかと思ひ、ぼくは質問を繰り返す。

肯定とも弱々しいうめき声ともとれる返事だった。「うん。」

「どうしてミロっていうの？」

ペダルを十回漕ぐだけの間が空いてからハーランが答える。「ぼくの肌の色が、ミロに似ているから。」

「ミロって？」

「※3牛乳で溶かす粉。」

ああ、と声もれ、ペダルを漕いでいた⑧ぼくの足がとまった。※4惰性のスピードが落ちるとまた漕ぐが、すぐに足はとまってしまふ。

なにか言わなければとあせればあせるほど、車輪のまわる音が大きくなっていく。

そのとき豆腐屋のラップがまた聞こえてきた。横道に顔を向けるとさきほどのオートバイがこちらに向かってくるところだった。ぼくはハンドルを強く握りなおした。

「キムコはあの豆腐屋の人からこの自転車をもらったんだ。」ぼくは⑨思いついたことを口にした。

「やっぱり返してくれて言われるかもしれないから逃げようか。」

「うん。」

ハーランの声とともに、ぼくは背すじをのばしてペダルを踏みこんだ。

「どう？ 追ってくる？」

「こつちに曲がってきたよ。」

「きつとこの自転車を取り返そうとしてるんだ。スピードをあげるぞ。しっかりつかまってる。」

ぼくの脇にあてられているハーランの両手に力がこもる。ハーランがサドルを調節してくれたおかげで、これまで乗ったことのあるどの自転車よりも圧倒的にはやく風を切るができるようになった。

「はやい！ すごいはやい！」ぼくはわめいた。「もう少して※5マッハ1だ」

「うん！」

ハーランの返事を受け、ぼくは宣言する。「マッハ1！」

「マッハ1！」とハーランが繰り返す。

「豆腐屋は？」

「ずっと向こう！ そこを左に曲がって！」

⑩角を曲がるとぼくらは高らかに笑いあつた。

（天山尚利『ライオンのつづき』より。設問の都合上、文章を一部改変しています。）

※1 ライオン…：ハーランの同級生 ※2 誹謗…：他人の悪口を言うこと

※3 牛乳で溶かす粉…：「ミロ」（商品名）は牛乳に入れて溶かすとコーヒ―牛乳のような色の飲料になる ※4 惰性…：これまで続いてきた勢い

※5 マッハ1…：一秒間に三百四十メートル進む速さ

問一 ――線部①「すれちがいざま」の意味として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、すれちがう前に

イ、すれちがうと同時に

ウ、すれちがった後で

エ、すれちがってからしばらくたって

問二 ―線部②「十一月の風がぼくらだけに吹きつける」とありますが、このときの「ぼくら」の気持ちはどのようなものですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、秋の終わりのさわやかな風が吹く様子が、豆腐屋の仕事を引退した自転車と、古い自転車に価値を見出した「ぼく」の、奇跡的な出会いを喜び、たがいをたたえる気持ちを表している。

イ、秋の終わりのすがすがしい風が吹く様子が、新しいオートバイでさっそうと配達する豆腐屋のおじさんと、仲間と楽しい毎日を送っている「ぼく」の、前向きな気持ちを表している。

ウ、冬の初めの冷たい風が吹く様子が、新しいオートバイに豆腐屋の仕事をうばわれた自転車と、豆腐屋のお下りの古い自転車に乗る「ぼく」の、情けなくて寂しい気持ちを表している。

エ、冬の初めの凍えそうな風が吹く様子が、大事にしていた自転車を手放した豆腐屋のおじさんと、仲間とうまくいかずひとりぼっちの「ぼく」の、孤独でつらい気持ちを表している。

問三 ―線部③「うろたえた」とありますが、「ぼく」が「うろたえた」のはなぜですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、これまであまり話したことがなかったハーランが、何の迷いもない様子で「ぼく」の自転車に乗ったから。

イ、しぶしぶさそっている「ぼく」をあざ笑うかのように、ハーランが堂々と後ろにまたがったから。

ウ、「ぼく」に悪意を持つハーランが、「ぼく」の自転車を見ていかにも乗せてほしそうな態度を見せたから。

エ、ぼろぼろで乗っているのははずかしいような「ぼく」の自転車を、ハーランがとても乱暴にあつかったから。

問四 ―線部④「その言葉の意味」の内容として、最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、たとえ才能があったとしても画家はだれでも貧しい暮らしを送るしかないので、生活に困らない別の職業を目指した方がよいということ。

イ、努力して絵を描き続けた時間が惜しくなり、どんなに貧しくても今さら夢をあきらめて別の職業を選ぶ決心がつかなくなるということ。

ウ、絵を描くことを職業にすると生計を立てることが目的になってしまいうので、純粹に楽しみたいなら趣味にしておく方がよいということ。

エ、絵には人間をとりこにする中毒性があり、一度取りつかれたら逆らえなくなっていくのまにか自分の人生を滅ぼしてしまうということ。

問五 ―線部⑤「ひとつの事実」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、ハーランは「ぼく」の夢をうばおうとは思ってもいなかったのに、才能の差を感じた「ぼく」が一方的にハーランを遠ざけていたということ。

イ、ハーランは以前から「ぼく」と仲良くなりたいと願っていたのに、「ぼく」がそっけない態度をとるため一度も話しかけられずにいたということ。

ウ、ハーランはひかえ目な性格の少年なのに、「絵の才能を見せびらかして得意になっている」と「ぼく」が勝手に誤解していたということ。

エ、ハーランは「ぼく」に親しみを感じていたのに、ハーランの才能をひがんだ「ぼく」が意地悪な態度でかれを苦しめていたということ。

問六 ―線部⑥「とげがあった」の問題文中の意味として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、自分の身を守るための鋭い備えがあった。 イ、じょうだんを言い合う親しみがあった。

ウ、強い者に必死で立ち向かう勇気があった。 エ、人の心をつきさすような悪意があった。

問七 ⑦ (問題文中に二か所あります)に入れるのに最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、知り合い イ、クラスメイト ウ、友だち エ、先輩

問八 ―線部⑧「ぼくの足がとまった」とありますが、それはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

問九 — 線部⑨「思いついたこと」とありますが、それはどのようなことですか。次の文の①() ②()にふさわしい言葉を、それぞれ十字以内で答えなさい。

豆腐屋から逃げることを口実にして、ハーランを①

()ために②

()こと。

問十 — 線部⑩「角を曲がるとぼくらは高らかに笑いあつた」とありますが、このときの「ぼく」と「ハーラン」の気持ちはどのようなものですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア、「ぼく」はハーランが建築家に興味がないことを知り、ハーランは「ぼく」が兄のような気さくさで接したことで、たがいの誤

解が解け、ほっとした気持ちになった。

イ、「ぼく」はハーランが人間関係で悩んでいることを知り、ハーランは「ぼく」に事情を打ち明けたことで、それぞれの感情を共有し、おだやかな気持ちになった。

ウ、「ぼく」はハーランの豊かな才能や負けん気の強さを知り、ハーランは「ぼく」を頼りになる存在だと思ったことで、相手を認め合い、前向きな気持ちになった。

エ、「ぼく」はハーランの素直な性格やつらい事情を知り、ハーランは「ぼく」のさりげない思いやりにふれたことで、二人の心が近づき、晴れやかな気持ちになった。

〔四〕次の問いに答えなさい。

問一 文中で「何が(だれが)」にあたる部分を主語、「どうする」「どんなだ」「なんだ」「ある(いる)」にあたる部分を述語といいます。次の文の主語と述語を、例にならって記号で答えなさい。

〈例〉ア赤い イ車が ウ走る。 答え 主語(イ) 述語(ウ)

① ア父は イ昔、 ウ故郷の エ中学校で オ駅伝の カ選手だった。

② ア雨上がりの イ空に ウ現れた エにじが オきれいだつた。

③ アここに イあつたよ、 ウさつきから エ探して オいた カおじいちゃんの キメガネが。

④ アみんなから イ好かれて ウいる エ田中さんこそ オ学級代表に カなるべきだ。

問二 次の□は文中のどの言葉にかかりますか。例にならって記号で答えなさい。

〈例〉ア兄の イ作る ウ料理は □とても エおいしい。 答え(エ)

① あのア黄色い イ三階建てが ウぼくの エ家です。

② ア明日は たぶん イ美しい ウ青空が エもどるだろう。

③ 真新しい ア白い イノートに ウマジックで エ名前を オ書く。

④ アかれは イリーダーとして □立派に ウ自分の エ役割を オ果たした。

問三 次の①～③の空らんに通ずる言葉を入れて、ことわざ・慣用句を完成させなさい。

〈例〉()に流す …いざいざなどをなかつたことにする。

① 知らぬが() …性質が合わず、うまくいかない。 答え (水)

()の顔も三度 …どんなおとなしい人でも何度もひどいことをされれば怒り出すということ。

② あげ()をとる …人の言いまちがいや言葉の一部分だけをとらえて困らせる。

()が出る …予定より多くお金を使ってしまうこと。

③ ()が知らせる …なんとなく予感がすること。

一寸の()にも五分のたましい …弱い者にも意地がある。

問四 次の①②とよく似た意味になる語(類義語)、③④と反対の意味になる語(対義語)を後から選び、漢字で答えなさい。

- ①興味 ②音信 ③禁止 ④現実

- ア、理想 イ、許可 ウ、関心 エ、困難 オ、無事 カ、消息

国 語 解 答 用 紙

得 点

受 験 番 号

内には何も書かないこと。

〔 一 〕			
⑬	⑨	⑤	①
			ねる
⑭	⑩	⑥	②
		んだ	れる
⑮	⑪	⑦	③
	き		
	⑫	⑧	④

〔 二 〕						
問九	問八	問七	問六	問五	問四	問一
				(一)	(二)	(一)
						問二
				(二)		問三

〔 三 〕					
問十	問九	問八	問六	問三	問一
	②	①			
			問七	問四	問二
				問五	

〔 四 〕		
問四	問二	問一
①	①	①
		主語
②	②	
		述語
③	③	②
		主語
④	④	
		述語
	問三	
	①	③
		主語
	②	
		述語
	③	
		④
		主語
		述語

